仮説の物語り

いかに事実を発見するか

松本健一

新潮社

新潮社

仮説の物語り

いかに事実を発見するか

松本健一

仮説の物語り　いかに事実を発見するか

印刷　一九九〇年一〇月二〇日
発行　一九九〇年一〇月二五日
著者　松本健一
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
〒一六二　東京都新宿区矢来町七一番地
電話　業務(03)二六六―五一一一　編集(03)二六六―五四一一
振替　東京四―八〇八
印刷所　東洋印刷株式会社
製本所　大口製本印刷株式会社
価格はカバーに表示してあります

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Kenichi Matsumoto 1990, Printed in Japan

ISBN4-10-368403-8　C0095

仮説の物語り＊目次

I

発見される事実をめぐって

人魚の写生図　8
「鼻行類」というフィクション　17
史（資）料の虚実　24
中居屋重兵衛文書の構想力　29
模倣と創造　37
文学研究（学問）と文芸批評　47
「たけくらべ」論争　49
『雪はよごれていた』のイデオロギー　57
『太平記』とアカデミズム史学　67
『わが友マキアヴェッリ』が発見したもの　74
オリジナルな仮説　78

II

歴史という物語

冬の西会津で　90
現在(いま)の私、という主体　94
『司馬遷』の方法　99
非歴史主義への誘い　106

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

歴史におけるイデー（理念） 113
『日本文化私観』の合理的精神 118
『異形の王権』の現在性 122
歴史的リアリティについて 130
同一の事実から、異なった物語が 137
姿をあらわすもの 143

III 仮構の発生する場所

「不幸」をあらわす数式 152
芳洲と白石、あるいは学芸と文芸 160
『市塵』の白石像 165
ノンフィクションの限界 169
『「明治」という国家』の仮説 178
細部の事実からの復讐 187
井上剣花坊、信子、鶴彬の川柳作品 195
事実の内側にひそむ物語 202
『ストロベリー・ロード』の自己解放 207

あとがき 212

仮説の物語り

――いかに事実を発見するか

I 発見される事実をめぐって

人魚の写生図

松森胤保（たねやす）という、明治初年の出羽における博物学者は、ほんとうに人魚を見たのであろうか。というのも、松森が五十代の明治十年代半ばより晩年（明治二十五年、六十六歳で没）にかけて描きあげた『両羽博物図譜』には、出羽地方における動植物の正確な写生図のあいだに、架空の生き物といわれる人魚の詳細な写生図が入っているからだ。

これが人魚の想像図あるいは空想図なら、古来いくつも描かれてきており、いまさら誰も驚かない。ところが、松森が描いた人魚の写生図というのは、詳細きわまりないうえに、想像を絶した奇怪なものなのである。

まず、この人魚は、生きている状態もしくは死の直後の状態ではなく、干からびた、つまりミイラ状のものとして描かれているのだ。そして、松森はこのミイラ状の人魚に対して、肩巾四寸、腹巾二寸五分、肩から腰まで四寸五分、腰からはじまる背ビレの峰の長さ二寸五分……と細かく寸法を書き加えている。ミイラ状であるから生前の状態より寸がだいぶ縮むと考えられるので、寸法そのものはあてにならないが、このように細かく寸法が記されることによって、その人魚図

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

がいかにも正確な写生であるという印象が生じてくる。
しかも、その写生された人魚の姿形の奇怪さは、他に類似のものがないだろう。上半身が人間(女)、下半身が魚というのは、別段珍しくもないが、その女の上半身は痩せさらばえて、背骨、肋骨が浮きでている。頭髪はうすく、顔は絶世の美女どころか、骸骨になりかかった醜い老婆、といった感じである。
こういった奇怪な写生図を目にすると、誰でも、洲之内徹のように考えたくなるだろう。洲之内は『気まぐれ美術館』の第五冊目のタイトルとなった『人魚を見た人』(新潮社、一九八五年刊)に、この写生図を見たときの驚きを、次のように記している。

……私は私の人魚、ひと月前に、酒田の光丘(こうきゅう)文庫で見た『両羽博物図譜』の中の人魚を思い出していた。ひたすらに写実を志して丹念に写生した魚だの、鳥だの、草花だのの中に混って、突然、一枚の人魚の写生図が出てくるのだ。
あのときは、私は本当に驚いた。呆気にとられた。人魚という、もともと空想の生物が、どんなに空想を逞しくして描かれていても、決して驚きはしないだろう。(中略)ところが、いま、そういうものであるはずの人魚が、私たちが日常見慣れた雑魚や野草の続きに、平気な顔をして並んでいて、同じ存在権を主張しているのだった。

もっとも、人魚とはいってもそれは人魚のミイラで、半分骸骨になりかかった顔は人間の老人を思わせるが、どこかで何かの獣に似ている。下半身は明かに魚だが、空想で人魚を描くな

ら、人魚をこんな醜怪な姿には描かないだろう。こんなものは空想からは生まれない。このものには、人間の空想を誘うものがない。おまけに、いちいちの細かい部分の寸法まで記入してあって、これが人魚かどうかはともかく、こういう現物を眼の前に置いて写したのは間違いない。（ルビ、傍点引用者）

洲之内はここで、人魚というものは「もともと空想の生物」だ、とアッサリ書いている。それはそうだ。今日では、人魚は海にいるジュゴンを見間違ったか、それから空想したものだ、という説が一般的になっている。人魚の肉を食べると不老・不死になる、という伝説も、これが空想上の生物、つまり不老・不死でありたいと希う人間の、限りない願望が生みだした架空の生物である所以を証かしていよう。

それはそうなのだが、松森胤保の生きていた幕末から明治の始めのころの常識では、人魚は伝説的な生物ではあっても、その存在が現実的に否認されていたわけではない。それどころか、当時の正統的な学問である本草学——東洋における博物学——では、人魚を実在の生物として認めていたのである。松森もそうだが、本草学の流れを引く南方熊楠などでも人魚の存在を明らかさまには否定していない。

南方熊楠に「人魚の話」（明治四十三年）というエッセイがある。これは人魚の存在を学問的に検討する目的の文章ではないのだが、当時の常識や本草学にあって人魚がどのようなものとして考えられたかを教えてくれる文章といっていい。まず熊楠は、「田辺へ『人魚の魚』売りが来た

とかいうことじゃ。（中略）昨今また月を賞するとて柴庵を訪うたところ、一体人魚とはあるものかと問われたが運の月、ずいぶん入監一件（家宅侵入罪による――引用者註）で世話も掛けおる返礼に、『人魚の話』を述べる」と前口上をいう。そして、人魚についての種々のエピソードを次のように記すのだ。

寺島氏の『和漢三才図会』に、（中略）人魚、一名鯪魚、魚身人面なるものなり、とある。（中略）昨今有り振れた人面獣身よりも優じゃ。さて、『本草綱目』に、謝仲玉なる人、婦人が水中に出没するを見けるに、腰已下みな魚なりしとあり、定めて力を落としたことだろうが、そんなところに気が付く奴にろくな物はない。（中略）

さて寺島氏続けていわく、今も西海大洋中、間人魚あり。頭婦女に似、以下は魚の身、麁き鱗、浅黒くて鯉に似、尾に岐あり、両の鰭に蹼あり、手のごとし、脚なし、暴風雨の前に見われ、漁父網に入れども奇しんで捕えず。（中略）一六六八年（寛文八年）マドリド板、コリン著『非列賓島宣教志』八〇頁に、人魚の肉食うべく、その骨も歯も金創に神効あり、とあり。それより八年前出板のナヴァレッテの『支那志』に、ナンホアンの海に人魚あり、（中略）その地の牧師フランシスコ・ロカより驚き入ったことを聞きしは、ある人、漁して人魚を得、その陰門婦女に異ならざるを見、就いてこれに婬し、はなはだ快かりしかば翌日また行き見るに、人魚その所を去らず。よってまた交接す。かくのごとくして七ヵ月間、一日も欠かさず相会せしが、ついに神の怒りを懼れ、懺悔してこのことを止めたり、とあり。

さすがに博覧強記の熊楠であるから、エピソードも多岐にわたっている。ちなみに、右の文中で、人魚の腰から下は魚であるなどということに「気が付く奴」には「ろくな物はない」という箇所は、この文の別の目的、つまり当時神社合祀に反対する熊楠を弾圧した郡長や県の内務課長などを間接的に揶揄するためのものとおもわれる。

そういった点についてはともかく、熊楠がこのエッセイでふれている人魚についての文献や伝説はすべて興味本位のものとはいえ、西洋近代の博物学が確立する以前の日本にあっては、人魚は南海（フィリピン周辺——ジュゴンの棲息地）に実在すると信じられていたことを示している。ところが、人魚の写生図をかいた松森胤保などは、日本で最初に西洋の博物学に興味をもち、ダーウィン進化論を採用した一人でもあったのだ。

たとえば松森は、明治十年に来日して大森貝塚の発掘で有名になったE・S・モースのことを早くから知っていた。かれの『弄石余談』には、「西洋人大森辺とかにて地表を相し神代器械を得し事」、と記されている。神代器械とは、古代の道具類つまり矢じりなどを指しているらしい。

かつて出羽庄内支藩である松山藩の家老をつとめ、慶応三年には、藩兵をひきいて庄内藩士とともに、江戸の三田薩摩藩邸焼打ちに参加し、戊辰戦争では、東北列藩同盟の一方の雄であった庄内藩の参謀をも兼ねて薩長連合と戦った松森胤保が、明治以後は、一転して博物学者になり、『両羽博物図譜』ほかの驚くべき仕事をなしとげた。この人物の面白さと謎については、別に一

大評伝を試みなければならないだろう。わたしがここで書いておかねばならないのは、松森の素養である本草学と新たに獲得した進化論的な博物学との合体のうえに形づくられた自然観（思想）にあっては、洲之内徹のように人魚というものは「もともと空想の生物」だ、とアッサリいいきってしまうことができぬどころか、その実在を信じても一向に差支えないものだったのではないか、ということである。

もちろん、洲之内もそうアッサリいいきってしまうことに不安というか、やや疑問を抱いていたようで、かれはさきに引用した文章の後を、こう続けている。

それでも、こんな生き物（下半身は魚で、上半身は骸骨になりかかった老婆のような、ミイラ状の人魚――引用者註）が実際にいたかどうかにはなお疑いが残る。しかし、同時に私は、光丘文庫の壁に掛っているこの『両羽博物図譜』の筆者、松森胤保の大きな写真を思い出すのだ。明治二十四年、松森胤保六十六歳のその写真をここへ入れておくから、読者もこの顔を見ていただきたい。

この顔。この顔が「オレは人魚を見た」と言うのなら、一切の詮索は無用、人魚はゼッタイに存在したのだ、と私は思ってしまうのである。

何という人。何という時代であったろう。

わたしの密かに敬愛した洲之内徹がこう書いているのだから、かれが信じているように「人魚

はゼッタイに存在したのだ」と、わたしもまた信じてみたい。そのほうが楽しいではないか。しかし、そうすることが学問的な実証のうえに成り立った知識というものではなく、いわば文学的な意味での信仰であることも、わたしは同時に知っている。松森胤保という、明治初年の出羽における博物学者が、なぜこのような人魚の写生図を描いたのか、ということは、やはり一度は思想史的に、いいかえると学問的に追究されなければならないことだろう。

ちなみに、松森六十六歳の顔は、一口に説明しようとすれば、洲之内が書いているように「この顔」としか形容しようがない。理知的というより呆然とするような広い額、怜悧なリアリストといった感じの目、ガンコに張った顎、有無をいわせぬ口元。「この顔」が「オレは人魚を書いたぞ」といっているのだ。

断っておくが、わたしは洲之内のように、松森が「オレは人魚を見た」といっているとは考えない。それは、かれの思想や思想の背景（精神のありよう）からして、かれが実際にそれを見たかどうかは別にして、人魚を詳細に描くことはありうる、とおもうからである。

というのは、松森の素養である本草学にあっては、西洋近代の博物学とはちがって、事物の外見の類似が重要視されるのであり、そういった物の見方のうえにモースが東大で行なった講義である『動物進化論』（明治十六年刊、石川千代松訳）の思想が重ね合わされると、どのような自然観が生みだされるか、とわたしなぞは考えるからである。たとえば、松森が明治十年ごろに執筆した『求理私言』は本草学的な自然観に立脚したものであるが、そこには、次のような記述があるのだ。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com